



Title	イエスに選ばれた女弟子 : M. Fredriksson : "enligt Maria Magdalena"(1997)をめぐって
Author(s)	菅原, 邦城
Citation	IDUN. 2001, 14, p. 301-321
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95690
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イエスに選ばれた女弟子

— M. Fredriksson : “*enligt Maria Magdalena*” (1997) をめぐって —

菅原 邦城

– Det är kanske viktigt att också
vi lägger fram våra vittnesmål.¹⁾

1. 序：作者紹介

スウェーデンの作家マリアン・フレードリクソン (Marianne Fredriksson, 1927-) は、日本の翻訳文学の世界にあってはいまなお無名の存在であろう。ようやく最近彼女のベストセラー *Anna, Hanna och Johanna* (1994) が、『白夜の森』(=フレドリクセ[マ!])ン 1999) といかにも純北欧産といわんばかりの書名で大手出版社から刊行された(参考までに記せば、原題はシンプルに女系3代の名前を採って『アンナ、ハンナそしてユハンナ』)。この邦訳はなぜかスウェーデン語原書から直接訳出されず、英訳 *Hanna's Daughters* から重訳された。そのためもあってか、訳者は作品の背景となっている近現代の北欧事情に相当うとい。その結果、訳書の出来映えは、わが国読書界への初登場としては原作者に対してまことに気の毒だといしか言いようがない。ちなみに、この小説はスウェーデンでは映画化されるほど読者に支持された。²⁾

フレードリクソンの作家デビューは、スウェーデンの作家としては例外と言っているほど遅く、50才代の1980年であった。³⁾しかし、その後の執筆活動はめざましく、1999年の最新作の小説『渡り鳥』(*Flyttfåglar*)を含めて小説11作、エッセー集1冊、1976年出版のものも含めて共著3冊を発表している。こうしてフレードリクソンは、今日国の内外でもっとも読まれるスウェーデン人作家の一人となっている。⁴⁾

フレードリクソンはスウェーデン第二の大都市イエテボリに生まれ、作家になるまでは家庭向けの雑誌 *Allt i hemmet*, *Allt om mat*, *Vi föräldrar* などの創刊を手がけ、その後は全国紙 *Svenska Dagbladet* のコラムニストをつとめた。これらの業績によって1968年に「ジャーナリスト大賞」(*Stora Journalistpriset*)を受賞した。⁵⁾ また作家としては1995年に大手出版社のBMF小盾を授与された。⁶⁾

文壇登場が比較的最近であるためであろうが、最新の文学史の類においてもマリアン・フレードリクソンについて叙述されることはあまり多くない。例えば女性文学史を扱った Forsås-Scott (1997: 189) でさえ、フレードリクソンの文学に割

かれた行数はさしさわりのないコメントを付したわずか7行で、しかも1990年の作品で終わっている。さらに目下最大のスウェーデン文学史において Lönnroth & Göransson (1990: 159) は、囲み記事中の短い2行を使って「連作小説においてフェミニズムの精神 (feministisk anda) で聖書の楽園神話を再解釈している」と評している。他書によれば、その解釈は「新しい視点」⁷⁾ から行われているとも特定される。

フレードリクソンの最初の小説 *Evas barn* (『エヴァの子供たち』1980) は、これに続く2作 *Kains bok* (『カインの書』1981), *Noreas saga* (『ノレアの物語』1983) と合わせて3部作 *Paradisets barn* (『楽園の子供たち』) をなしている。このように、フレードリクソンの小説は聖書から題材ないしはインスピレーションを得ているものがその半数余りになり、本稿で紹介する作品もまた新約聖書からよく知られ伝説化している女性を主人公とする。しかしながら、これらは決して“正統派”の著者による再話的な聖書物語とはみなされない。その他の作品は、例えば *Anna, Hanna och Johanna* や *Simon och ekarna* (『シーモンとオークの樹』1985), *Gåtan* (『なぞ』1989) などは19-20世紀を背景に展開している。

書名“*enligt Maria Magdalena*”は、オランダ語からスウェーデン語に訳された文献に見出される外典の名“*Evangeliet enligt Maria*”⁸⁾ からヒントを得たものか。あるいは必ず、古代キリスト教最大の異端とされたグノーシス派のナグ・ハマディ文書 (Nag Hammadi Library) の一部を成す「マリアによる福音書」から得たのかもしれない。少なくとも後者の書名は、原作の表紙カバーに記されている作家自身のことばの中で言及されている。

2. 四福音書にみるマグダラのマリア伝承

本稿の筆者は前章末尾に、本作の主人公について、新約聖書からよく知られて伝説化している女性であると記した。しかし、日常筆者が接している日本人(=非キリスト教徒)学生たちの多くがそのような常識を持っているかどうか、はなはだ心もとない。新約聖書の中の種々の記述を挙げてマグダラのマリアに関することだとして一般に流布している知識は、ごく簡単に言えば以下のようなものであろう。

彼女はイエスによって七つの悪霊からいやされ、その後は忠実に彼に従い、イエスの磔刑と埋葬の場にもいた。(Topelius 1989: 104)

しかしながら、この2行だけの内容ではとても十分に正確な知識とは言えまい。そこで、少し長くはなるが、マグダラのマリアに具体的に言及している8箇所を、新約聖書冒頭に並ぶ福音書から順番に引用しておく。⁹⁾ 言うまでもないが、福音書間に認められる本質的あるいは非本質的な相違は、それぞれの福音書記者の考

えを反映した結果である。

- (1) しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。[中略] またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた。（「マタイによる福音書」27章50-56節）
- (2) さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。[中略] 天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。」婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。イエスは言われた。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」（「マタイ」28:1-10）
- (3) 百人隊長がイエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。また、婦人たちも遠くから見守っていた。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセフの母マリア、そしてサロメがいた。この婦人たちは、イエスがガリラヤにおられたとき、イエスに従って来て世話をしていた人々である。なおそのほかにも、イエスと共にエルサレムへ上って来た婦人たちが大勢いた。（「マルコによる福音書」15章39-41節）
- (4) 安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。そして週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。[中略] 墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座しているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとベテロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。かねて言われていたとお

り、そこでお目にかかれる』と。」 婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失った。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

イエスは週の初めの日の朝早く、復活して、まずマグダラのマリアに御自身を現された。このマリアは、以前イエスに七つの悪霊を追い出していただいた婦人である。マリアは、イエスと一緒にいた人々が泣き悲しんでいるところへ行って、このことを知らせた。（「マルコ」16:1-10）

- (5) すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って一行に奉仕していた。（「ルカによる福音書」8章1-3節）
- (6) そして、[婦人たちは]週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。[中略]そこで婦人たちはイエスの言葉を思い出した。そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たちであった。（「ルカ」24:1-10）
- (7) イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。（「ヨハネによる福音書」19章25節）
- (8) 週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」[中略]マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか、と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」こう言いながら後ろを振り向くと、イエスが立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」イエスが、「マリア」と言われると、彼女は

振り向いて、ヘブライ語で「ラボニ」と言った。〔中略〕マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。（「ヨハネ」20:1-18）

さらに、マグダラのマリアの名を挙げて、上述(4)にもっとも近い内容をもつ聖典、いわゆる外典の一書「ペテロ福音書」がある。¹⁰⁾

3. 小説 “*enligt Maria Magdalena*”

3.1. 小説の構成

全 256 ページからなる小説 “*enligt Maria Magdalena*” (直訳すれば『マグダラのマリアによれば』) は 4 部から構成され、それぞれ長短合わせて 18 章、14 章、7 章そして 5 章に分けられている。ここで「章」というのは、本稿の筆者が便宜的に呼んでいるにすぎず、原作では単にページを改めてあるだけである。いっそう本質的なことは、作品中の時間が一方向へと流れずに過去から現在に、あるいはその逆にと、同一章内でも、現在と過去の間を自由に移動していることである。その大きな理由は、主人公が現在の時点で過去を思い起こし書き留める、あるいはペテロとパウロがマグダラのマリアから往時のイエスの言葉と業について聴き取り若きマルコが書き記す、という形式が採られているからである。

3.2. 小説 “*enligt Maria Magdalena*” のあらすじ

この小説は次の文章で始まる。

アンティオキアの広場で、女は男が語るのを聞いていた。シモンという名の男だが、ペトロとも呼ばれている。いかにも彼らしかった。ゲネサレ湖畔出身の漁師は、堂々とした姿もびくともしない顔の表情も失わずにいた。そして眼差しもあいかわらず子供っぽく、深みがなかった。（原作 9 ページ）

これは、主人公マグダラのマリアがイエスの他の弟子たちと別れたのち長らく暮らしていたシリアの首都アンティオキア (Antiochia) での光景である。この頃マリアは 40 才を多少過ぎていたろう。シモンとも呼ばれたペトロ (Simon Petrus) は疲れも飽きもせず、イエスの教え — 「あなたがたはたがいに関しあいなさい」を繰り返していた。いまのマリアは絹商人のギリシア人レオニダス (Leonidas) の妻として、一見キリストの教えとは無関係に裕福な生活を送っている。それでも、イエスについては「彼女は自分のほうがもっとよく知っているはずだと思っていた」(原作 10 ページ)。彼女はエルサレムで使徒たちと最後に会ったときのやりとりを思い出した。

彼らはマリアに頼んだ。「あの方があなたに話していて、わたしたちが知らないことを教えてください」(原作 11 ページ)

マリアによれば、イエスがとりわけ強調したことは、

「元気でいなさい。人の子はあなたがたの心の中にいます。彼に従って行きなさい。彼を求める人は彼を見出すでしょう。わたしがあなたがたに対して明かしたこのことについて規則など一つも作らないようにしなさい。律法学者が書くような法を一つも書かないようにしなさい」

「これらの言葉を主が言われたとは思わない。なぜあの方は女と二人だけでひそかに話され、公然とわたしたちとは話されないというのか」

「兄弟のペトロよ、あなたはわたしが主について嘘を言っていると思うのですか」(原作 11 ページ)

以下の要約では、マグダラのマリアの幼い頃からアンティオキアにおける現在までの人生をまとめることにする。小説の舞台となった時代は西暦 1 世紀、キリストがその教えを始め、その磔刑・復活・昇天ののちシモン・ペトロをはじめとする弟子たちが師の教えを地中海世界に広めつつあった時期である。そしてこののち数世紀にわたってイエスの言行が結集されて新約聖書が確立されていく。この結集の事業の一環としてペトロとパウロ (Paulus)、そして少年書記マルコ (Markus) がしばしばアンティオキアにマリアを訪れたとされる。

イスラエル北部にあるガリラヤ湖（またはゲネサレ湖）に沿っていくつかの町や村があるが、その一つにマグダラ (Magdala) があった。そこで貧しい農民の第一子に生まれたのが主人公マリアである。「マリアは 5 才にならないうちから村の周りにある岩の原で動物たちの番をさせられていた」(原作 23 ページ)。この第一子は息子ではなく娘であるばかりか、金髪碧眼という、黒髪黒目のユダヤ人らしからぬ容貌をしていたために、父と弟たち・母の兄弟そして隣人から無視されていた。そんな彼女を慰めてくれたのは唯一母だけであった。彼女が他人から無視される理由が分かったのは、通りがかりの青い目をした占領ローマ軍兵士を見たときだった。「二人の目が合ったのはほんの一瞬のことだったが、マリアには深い印象を与えた。彼女はみんなの憎悪的になっている外国人に似ていたのだ！」(原作 26 ページ)。ある日、言っている言葉の意味が分かっているのかどうかも分からないすぐ下の弟から、「みんながおまえのことを穢(けが)れてるって言っている。罪深い売女の子供だってさ」(原作 28 ページ)と決定的な侮蔑の言葉をぶつけられて、マリアは家出を決心した。家出を決行した夜、マリアは家族を占領軍に殺害され、自分一人だけ助かる。しかし家族の非道の最期を目にした衝撃はあまりにも激しくて、彼女は家畜番として歩き回っていたなじみの岩の原へ走り逃れた。

この金髪の少女を夜明けの荒れ野に見つけたのは、戦闘で負傷して治療のためティベリアスの軍本部に戻る途中のローマ軍百人隊長であった。彼はギリシア人

でレオニダスといった。もともとアンティオキアの裕福な絹商人の息子だったが、商売を嫌って傭兵となってローマ軍に身を投じ、家業は妹夫婦にまかせていた。ティベリアスは当時のローマ皇帝にちなんで建設されたが、別名「罪の町」として土地の住民から軽蔑されていた。そこで娼館を経営するエウプロシュネ (Euphrosyne) に隊長はマリアの養育を頼む。隊長にとってこのギリシア人はこの町で信頼できる唯一の女性だった。必要経費は一切レオニダスが負担するという申し出なので、エウプロシュネはその依頼引き受けて、しかるべき世話係と教師をつけてギリシア式の教育、古典ギリシア語とラテン語を修得させる。今やマリアの養父母の役割を担っていたレオニダスとエウプロシュネの間で、あるとき言葉が交わされた。

「あの子を娼婦にはならせない」

「でしたら、初潮を見る前にここから連れ出していただきますよ」

娼館から馬で戻りながらレオニダスは計画を練り上げていた。自分は数年したらローマ軍の勤務から解かれるはずだ。そのときは小さな娘を連れて故郷に帰ることにする。(原作 40-41 ページ)

このあとローマ軍は東のパルティア王国に遠征軍を派遣し、その中にいたレオニダスは不運にも捕虜として捕らえられ、妹が身受けするまで8年間行方不明になったままだった。この長い年月、“娘”マリアは“父”レオニダスが戦死したものと思って、悲しみに打ちひしがれて食事も満足にできずにいた。その間エウプロシュネもマリアをわが子同然に扱っていた。そして彼女も、数年後に娼館を売って故郷コリントにマリアを連れて帰ろうと真剣に考えるようになっていた。

やがてマリアは15才で、18才のローマ人兵士と恋をする。しかし、二人の間は1回だけの関係で終わってしまう。ところが身持ちの固いユダヤの娘であるはずのマリアは、育った環境のゆえか「彼女は男好きだった」(原作 87 ページ)。こうして、マグダラのマリアは本能にあらがうことなく自分からすすんで娼婦になっていった。

ある春の一日マリアは、幼いころ家畜を追っていた生まれ故郷マグダラの岩の原へ遠出をする。そこで、見知らぬ男と出会うことになった。

彼は若かった。その笑顔はまるで子供の笑顔のようだった。無邪気な人だと彼女は思った。

「私はナザレのイエスです」と男は言った。

「母に会いに行つて来て、この山を越えて近道をしてカファルナウムに戻るころでした」(原作 115 ページ)

「あなたはユダヤの女性ですね」[中略]「あなたは罪のない目をしておられる」

「ユダヤ人でないだろうと欺くのは目が青いせいです。わたしは罪の町[ティベリアス]の娼館で娼婦をしてきました。最後はおじいさんのローマ軍司令官のお妾をしていました。この人が死んだおかげで私は自由になって、岩の原に遠出をすることができました」(原作 116 ページ)

男の視線はマリアをとらえて離さなかった。こんなに真剣な人にはこれまで一度も会ったことはなかったと、マリアは思った。(原作 117 ページ)

こうしてしばらく互いの身の上話をしていたが、最後にマリアは自分の手をイエスの手の中に置いた。

このちょっと触れたことだけでマリアの体を衝撃が貫いた。その目には欲望の炎が燃え上がった。マリアはイエスの頭を両手ではさみ、それをそっと押さえておいて彼の口にキスをした。そうして起こるべきことが起こった。マリアの欲望がイエスの欲望に火を点けた。

彼は言った。「わたしはこれまで女性に近づいたことはなかった」

彼女は言った。「さあ来て」

初めは彼女が助けて、彼の手で彼女の体のどこに入ったらいいのか教えてやらねばならなかった。しかし、ほどなく二人はやさしく、そして素直に互いを求め、そして求めているものを見つけることができた。その後イエスは仰向けになって笑い声をあげた。

「わたしにはこんなことは理解できなかった」

「肉体の中にこんなに大きな喜びがあるってこと？」

イエスは目を閉じて答えなかった。(原作 118-119 ページ)

このあと、二人はカファルナウムでの再会を約束して別れる。このとき、マリアは男が預言者だということを知らなかった。この預言者、ナザレのイエスの噂を聞いていた養母エウプロシュネは娘の口からその名を聞かされ、彼が反乱者としてローマ軍によって処刑されるのではないかと、娘のために案じられてならなかった。

夜明けにマリアはカファルナウムに向かう — 「お母さんの目でイエスを見えます」(原作上掲箇所)という置手紙を残して。

こうしてマグダラのマリアはカファルナウムでイエスが行う奇蹟とらい病患者をいやすのを目撃して以後、ギリシアの故郷に帰ろうと準備をしていた養母のもとには二度と帰ることなく、伝道するイエスに従って町や村を巡って歩くことになる。そこで年配の女性サロメ(Salome)に出会う。マリアは夜明け間近の天幕のふしどの中で思った。

もしもあの方が正気をなくしておられるというのなら、わたしもそうなりかけている。(原作 129 ページ)

翌朝祈りが終わったとき、イエスはその集団の中にマリアを見つける。

「マグダラのマリアよ、よく来てくれました！」(原作 130 ページ)とイエスはマリアに接吻をして迎えた。その思いがけないイエスの行動に、弟子たちの集団の中に驚きのざわめきが流れた。

マリアはこの頃、夜明けのずっと前に目が覚め、イエスと共にヨルダン川に向かって歩いていった。[中略] 二人には弟子たちが従った。[中略] 川に着いて、渡し守が舟でやってくるまではたっぷり時間があった。埃と汗でべとべとになっていたマリアは言った。

「わたしたち、泳ぎましょう」

イエスに従って来た者たちは頭を振ったが、ティベリアスで泳ぎを覚えていたマリアは期待を込めた目でイエスを見て言った。

「さあ来て」

イエスは笑ってマリアについて川に入っていった。二人は泳いだ。[中略] 二人だけになれることは滅多になかった。(原作 140 ページ)

この頃イエスはその伝道のピークにあって行く先々で障害者をいやす奇蹟を行うと共に、「野の花」のような譬えを用いて彼の教えの核心を説いていた。

伝道の途上のある日、イエスがマリアに言った。

「今日あなたを大きな喜びが待っています。あなたが愛している一人の男性がこちらに向かっています」

「わたしはあなたに会うまではたった一人の男性しか愛していませんでした。でも、その人は何年も前に死にました」

イエスは答えなかったが、温かな微笑がその顔に残っていた。

その日の午後、

「マリアよ」

マリアの前に背の高いギリシア人の男が立っていた。しかしマリアの目を見るのを拒んだ。サロメはそばに立っていてマリアの顔が蒼ざめてゆく様子を目にして、彼女の体に腕をまわしてやった。しかしレオニダスは言った。

「おまえは私を見ると気が遠くなる悪い癖があるな」(原作 143 ページ)

その後まもなく、イエスは異教徒のレオニダスを抱擁して両の頬に接吻した。

「あなたの誠実さは天国で報われるでしょう」

「そうであっても何の不思議もありません」とレオニダスは言った。

「わたしはこの子を初めて見たときからずっと愛してきました」

レオニダスは穏やかさと大いなる幸せに満たされた。(原作 144-145 ページ)
カファルナウムの夜明け、イエスはまだ眠っていた。マリアはそっと忍び足で台所に下りて行ってイエスの朝食の支度をする。

イエスは言った。「今日は長い一日になるだろう」(原作 150 ページ)

この日は、イエスが母マリアその人について「わたしの母とはだれか」(「マルコによる福音書」3:33)と語った出来事で記憶される一日となり、主人公マグダラのマリアとイエスの母マリアが対面した日でもあった。

「あなたですか、わたしの息子と同棲している娼婦は」

「はい。でもわたしは娼婦ではありません」(原作 151 ページ)

「わたしはあなたについてかなりのことを知ってますよ。わたしの息子に出会って誘惑するまえはティベリアスのローマ軍司令官の妾でした」

「司令官は 80 才を過ぎていて半身不随でした。司令官はわたしが古典ラテン語を話すという噂を聞きました。それで私は司令官の寝台のそばに毎日座っては『アイネーイス』の中の長い詩を読んであげていました。わたしは額を拭いたり枕を換えたりしてあげました。それから痛みが激しいときには司令官の手を握っていました。その口さがない噂が町中に広まって、わたしの義母はすっかり絶望していました」

ナザレのマリアは軽蔑するような答えを用意していたが言わずにおいた。この若い娘の視線の中にははっきりと、彼女が真実を語っていると告げる何かがあった。(原作 152 ページ)

二人は沈黙してしまった。少ししてからマグダラのマリアがまた言った。「わたしがあなたの息子を誘惑したのだとあなたが言いはるのですしたら、あなたは自分の息子をよくご存知でないのだと、わたしには分かりました。イエスは誘惑されません、説き伏せられません、欺かれません。誰からだって」(原作 153 ページ)

しかしながらマグダラのマリアは、15 才でイエスを産んだ母マリアを慰める言葉をもっていた。

「あなたは大きい運命のために生まれたのです、ナザレのマリアよ。あなたはまちがいなく選ばれた方です」

しだいに二人のマリアは互いに親しみを覚えてゆき、母マリアは言う。

「わたしたちはお互いを理解するようになってきました。そしてわたしはたくさんのことを学びました」(原作 154 ページ)

「[前略] わたしの希望はマグダラのマリアにかかっています」(原作 155 ページ)

イエスとその弟子たちは死海北部地方で最後の伝道をしながら、やがて聖都エルサレムに上ってゆく。その前にベタニアの町でイエスは、死んだラザロをよみがらせた。そこで彼の姉妹マルタとマリアから晩餐に招かれる。食事に感謝の祈りを唱えたあとイエスはマグダラのマリアの手を取って庭に出た。二人は摒ぎわ

のベンチに腰かける。

イエスはまだマリアの手を自分の手の中に握っていた。しかしその手は冷たく、握る力も弱かった。

「わたしたちは今別れを言わねばなりません」とイエスは言った。

マリアは、嫌ですと叫びたかった。また、あなたに従って死への長い道のりをずっと歩いて行くつもりです、と大きな声で言いたかった。ところが、マリアは声を失ってしまっていた。(原作 200 ページ)

この後、作品では、おおよそ聖書の記述どおり、イエスのエルサレム入城、逮捕と死刑の判決、「されこうべの丘(ゴルゴタ)」での十字架による処刑が叙述される。

十字架が立てられたときマリア自身はまた目をつむった。そうしても無駄だった。まるで何本もの小刀が彼女の体を切り貫き、彼女の腹の中を何度もぐりぐりえぐるのだった。しかし最悪なのは心臓で、そこに刺された小刀は火のようにめらめら燃えていた。(原作 210 ページ)

しかし第9刻に、ついにイエスは息絶えた。

マリアが正気を失ったのは、その時だった。(原作 211 ページ)

イエスの伝道の旅に従ったマグダラのマリアは、養母エウプロシュネを見捨てたようになっていたが、イタリアに行く夫レオニダスの船便を利用して、養母をギリシアのコリントに訪ねることにした。約20年ぶりに母娘は再会した。マリアはエウプロシュネから、パウロがこの町で影響力を持つようになっていることを知らされる。そして、「新しい教会が言うとおりにすれば、すべてがあなたにとってうまくゆくでしょう」(原作 226 ページ)と勧められる。そう言いながらも、養母自身は心の中ではおそらくキリスト教徒だが、パウロの教会が若い男女の愛情をめぐるて厳しすぎるので、教会には属していなかった。

ある日、エウプロシュネが段取りしていた思いがけない出会いがマリアを待っていた。二階で身支度して階下へ降りてゆくと、そこには養母と共にもう一人、少し腰は曲がったが、ちゃんとした身なりの威厳のある老女が待っていた。

「スサナ！」とマリアが叫んだので、小鳥たちが木々から飛び立ったくらいだった。(原作 232 ページ)

あとはマリアの懐かしさがこみあげ、ただただ涙の再会場面となる。母にたしなめられて落ちついたマリアに、スサナが尋ねる。

「あなたはどこに行っていたのですか」

スサナの声は責めるものではなくて、マリアもこの問いは問われて答えねばならないと分かっていた。

「わたしは正気をなくしてしまったのです」とマリアは簡単に言った。二人

の驚く様を見たとき、マリアはまちがった言葉を選んでしまったと思った。

「精神的におかしくなって」と彼女は言った。

そして、ゴルゴタの刑場でマリアは自分の心がいつもの正常な部分と、考えることも感じることもない空白の二つの部分に分裂してしまい、命を脅かす痛みが伴っていたと、説明した。

「ようやく三日目に墓のそばでイエスに会って正気に戻りました。[後略]」

(原作 233 ページ)

ペトロとの激論ののち仲間のもとを去ったマリアは、心の空白の部分に逃げ込んだ。その記憶喪失に陥ってガリラヤの岸辺で眠っていたところをレオニダスが見つけ出す。このときからマリアは、商人の妻になってもいいと考えるようになった。

マリアと同様に、ペトロたち使徒が説くイエスの教えなるものを受け入れられなかったスサナ(Susanna) たちも、イエスが伝道の旅先で行った言行について記憶を掘り起こして、それをリディア (Lydia) が書き留めていた。この二人とサロメはエフェソス (Efesos) の小さな家で貧しくひっそり暮らしていた。

スサナがコリントに滞在していた日々、マリアはエフェソスのサロメとリディアに宛てて長い手紙をしたためていた。過去の多くの年月を説明してから、将来、少なくとも最も近い将来についても書いた。いかにすれば女弟子たちの協力を続けることができるかの計画を決めることである。しかし、レオニダスの重病のためマリアはアンティオキアに直行せざるを得なくなる。ある夜レオニダスが言った。

「よくイエスの夢をみる、イエスがここで光の中にいる夢だ」(原作 240 ページ)

それは、生きているマリアには見えない光であった。しかし、光が部屋中に満ちて目がくらむほどになっていた中でレオニダスはこの世を去った。マリアはこの日から数日はなんの記憶もなかった。

その後マグダラのマリアは、ひとりエフェソスのリディア、サロメそしてスサナの家にやって来た。翌朝、みなはまずレオニダスの死を悼んでから、双方で書き留めていたイエスの言行について語り合う。

三人の記憶は細かい点ではマリアのものと食い違っていることも少なくなかったが、見事なことに、四人はイエスの言葉と業をいかに同じに理解していたことか。

「わたしは自分で思っていたほどひとりぼっちではなかったのね」

次の日は終日女性たちは自分たちのいろいろな描写を、マリアの見た光景とリディアの記録を織り合わせていた。それは女性たちに力を与えた。彼女た

ちは裏付けを得たのだ。(原作 251 ページ)

最後に語ったのはサロメだった。

「わたしたちも自分の目撃したことを世に知らせることが大切かもしれませんね」

「そのとおりです」とマリアは言って、自分の計画を示した。(原作 253 ページ)

それは、女性だけのための修道院学校といえる施設をコリントに造る計画だった。しかし、三人は老齢、新しい土地への不安などを挙げて、今回は返事を保留せざるを得なかった。マリアは予定された船に乗ってエフェソスを去る。港には三人が見送り、たがいに再会と手紙のやり取りを約束する。

4. 暫定的考察

4.1. イエスがもっとも愛した女弟子

この小説に接する平均的なキリスト教徒は、救世主イエスはその母マリアと同じく童貞であった、と無意識に信じているのではなかろうか。そうであれば、イエスの性的交渉の相手が「罪の女」(「ルカによる福音書」7:37-50)とも目されるマグダラのマリアであったとしたら、たとえ文学(フィクション)とはいえ、この発想は到底受け入れがたいに違いない。「しかし、少なくともルカによる福音書の文脈では、この二人の女性は明らかに別人である。他の三福音書にも、マグダラのマリアが遊女であったと明言されている記事は全くない。」¹¹⁾ この聖書の一致した主張に反して、中世以来現代までヨーロッパ文化圏では「マグダラのマリア=娼婦」が常識となっていたと言えよう。したがって、作家フレードリクソンもこの常識を採ったことになる。

このマリアとイエスの間に性的な関係があったとする主張は、マグダラのマリアを称える動きが頂点に達した時期になされたと言われ、¹²⁾ また 1998 年のノーベル文学賞を受賞したポルトガルの作家 José Saramago もイエスがマリアと性的関係にあったと描いたことがある。¹³⁾ キリスト教徒の研究者として荒井(1999:208)はこれらの作家ほどむき出しではないまでも、「イエスとマリアの間にはイエスの生前からある種のスキンシップがあったのではないか」と想像力を刺激される読者もいるだろうと、述べている。彼が「スキンシップ」をいかなる意味で使用しているかは不明だが、講談社刊『日本語大辞典』(第二版, 1995)をみると「肌の触れ合いによる親密な交流」と説明されている。この意味における親密さと推測されるものを小説が表現している例として以下の文を挙げることができよう。カファルナウムにおける再会の場面である。

「マグダラのマリアよ、よく来てくれました！」

イエスの喜びは誰の目にも明らかで、祈りの集団の誰もが喜び合わねばならなかった。イエスはまっすぐマリアに向かって行って、その両手を取って自分の体へと引き寄せた。

「これはマリアという人です。わたしが出会って愛するようになった女性です」

イエスがマリアを抱擁して接吻したとき、弟子たちの集団の中に驚きのざわめきが流れた。(原作 130 ページ)

また容易に想像できることだが、伝道の旅の間、イエスの一行は男女別々の部屋を借りていた。

このことは、イエスとマグダラのマリアが一緒に寝られないことを意味していた。状況がこのような時はいつもそうであるように、二人は朝早く目を覚ましてしばらく周辺を歩いた。(原作 166 ページ)

さらに、マリアの養父レオニダスは若い二人のために友人から、ベトサイダの町からそう遠くないところに家を借りてやり、二人が他人に邪魔されずに時を過ごすことができるようにしてやった。

中年になったマリアがアンティオキアの自宅で自分の人生を振り返って記録することを決意した翌朝、起床したとき<人の子>(Människosonen)の微笑みを感じて励まされていると察する。

わたしはようやく、あなたがすべての人をつつむ愛でわたしを愛しておられることが分かりました。わたしを混乱させていたのは、弟子のみなさんがしょっちゅう言われた、あなたはいったい誰をいちばん愛しておられたかという話でした。あなたは愛しておられました。そしておそらくあなたは、わたしがあなたに肉体の愛を教えてあげて、それによって人間が置かれた有り様についてあなたの知識が増したことで、わたしに感謝の気持ちをもっておられたのかもしれませんがね。(原作 12 ページ)

使徒たちが執拗なまでに「先生は誰をいちばん愛しておられるのか」、そして心の中では、まさか「以前イエスに七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの婦人」(前出 2 章の福音書抜粋(4)(5)参照)¹⁴⁾などであろうはずがないと確信していたと推測される。しかしながら、エルサレムの隠れ家で最後にキリストの従者たちが話し合ったとき、使徒たちはマリアに、「あの方があなたに話して、わたしたちが知らないことを教えてください」(原作 11 ページ)と、暗にマリアがイエスに対して置かれていた特別な立場を容認していた。したがって、男性の弟子たちのマリアに対する感情は、実質的にねたみ、嫉妬と呼んでいいものだろう。(その一方で、ペトロはあからさまに女性を蔑視した — 「あの方が女と二人だけでひそかに話され、公然とわたしたちとは話されないというのか」(原作 11 ページ)

ジ)。新約外典「マリアによる福音書」の中で使徒フィリポが率直に述べている。「しかしキリストはわたしたちのだれよりも彼女を愛された。そのことにわたしたちは傷つき、反発した。」(トーマス 1999:171) この福音書に触発されたであろう現代の女性作家は、ヘレニズム世界に生きる母娘に次の会話をさせている。

「ペトロもパウロもあなたがイエスとどんな関係にあったかということについて、なぜ尋ねないのか考えたことがありますか」

「お気づきのとおり、わたしは何か言うのを避けました。シモン・ペトロは知っておりますし。パウロはその件にはこれまで一度も触れていません」

「でも何故でしょうね」

マリアは声をあげて笑った。「でもそれは当然ですよ、お母さん。あの人たちの神さまは女なんか必要としていませんでしたもの」(原作 228 ページ)

イエスの死後 30 年ほどの間にキリスト教会を組織化することに最大の貢献をしたパウロは、なぜかキリストとマリアの不適切な関係について無関心を装い、これは最終的には正典から排除されることになった。

4.2. 男性優位の教会に対抗する女弟子たち

キリスト教の神はそのユダヤ起源からして、まことに「天におられるわたしたちの父」(「マタイによる福音書」6:9) なる神であり、いわば家父長制度の家長を強く体现している。ユダヤ人の間に男尊女卑の風習がいかに根強かったかは、マリアが述べている絶望的な言葉が端的に示していよう — 「なに一つ変わることはないでしょう。使徒のみなさんはユダヤ人で、女には魂などないとか、男が唯一の人間だとかいう大昔から伝わっている偏見にどっぷりつかっているのです」(原作 96 ページ)

使徒ペトロが書いた手紙の内容はその典型といえた — 「あなたたち女はあなたたちの夫に従いなさい…」(原作 108 ページ)

これだけでも、自立的な女性を教会から遠ざけるに十分であろう。ところが、イエスは違っていた。

「あの方は女性について特別な考えはなにももっておられませんでした。あの方は女性を人間として見ておられました。あの方は女性たちに決してお世辞を言われませんでしたし、保護しようともされませんでした。あの方はすべての人間をご自分が見られたとおりに受け入れられました。あの方はまったく偏見をもっておられませんでした」(原作 99 ページ)

「[前略]『ここでは男性も女性もない』。あの方はわたしがこれまで会ったことがあった男性で、女性を人間として尊敬をもって扱ったただ一人の男性です。[後略]」(原作 108 ページ)

ならば、人間を男女で区別することなく平等に扱ったこのイエスが、なぜシモン・ペトロなどユダヤ的思考(法)をいつまでも捨て去れずにいた男性たちを使徒として選び採ったのか、理解に苦しむところである。

妻と同じくキリスト教徒になっていたギリシア人レオニダスのほうがキリストを正しく理解していた。彼はマリアから聴き取りにやって来たペトロたちに語った。

「さらに重要なのは、イエスその人が女たちを男より低い存在とは見ていなかったということではないか。ペトロよ、あなたはあの方がかつてあなたたちに何を教えられたか忘れたのですか」

「あの方が男たちは女たちのようになり、女たちは男たちのようになるべきだと言われたときのことですか」とペトロはしぶしぶ言った。「わたしはあのときも理解できなかったし、今も理解できない」(原作 176 ページ)

エフェソスで老女スサナも憤激している — 「女性たちに耳を傾けようとする人は誰もいない」(原作 253 ページ)

エフェソスを訪ねた折マリアは、自分がアンティオキアで体験したグノーシス派の礼拝の仕方を友人たちに紹介する。「そこでは全員が対等です」(原作 180 ページ)。その夜の司祭は男女信者の間でくじ引きによって決められ、マリアが出たときは女性が司祭の役を行った。教会で公に女性に発言を認めなかったキリスト教会およびその男性指導者たちは、まさにユダヤ民族の男尊女卑の風習を継承して、それから全く脱しきれずにいた。

5. おわりに

マリアン・フレードリクソンはこの小説によって何を意図していたのであろうか。それを推測して本稿の終わりとしたい。罪深い娼婦だったマグダラのマリアと、神の子イエスとの間に性的関係があったという伝承は多少なりともショッキングであるが、あえて絶対なかったと否定し去ることもできない。そうであったならば、異性としての女性の魅力をイエスに示すことは不可能であった男性弟子たちの(おそらく筋違いのものではあろうが)嫉妬も理解できるのではないか。

いずれにせよ、男性の使徒たちがイエスが最後の危険に陥ったときに彼を見捨てて逃げ去ったの対して、大勢の女性信者たち、そしてほぼ常にマグダラのマリアを福音書記者が筆頭に挙げざるを得なかった事実は、彼女がいかに重要な存在であったか(あたかも妻のごとき存在ではなかったか)を示していよう。彼女たちこそ最後までイエスにつき従った真の使徒であり、その中でもマグダラのマリアはペテロに劣らず選ばれた使徒なのである — 「あの方の…選ばれた人 (hans utvalda) であるあなた」(原作 161 ページ)とパウロが認め、マリア自身も「わた

しはそれでも選ばれた一人 (en utvald) なのだ」(原作 196 ページ) と意識していた。その証拠になろうか、正典にあって「イエスは〔中略〕復活して、まずマグダラのマリアに御自身を現された。」(「マルコ」16:9) と弟子たちの中で彼女が最初に、この上もない喜びと誉れを与えられている。そして彼女は誰よりも先に、イエスの遺体を引き取りたいとも述べている(「ヨハネ」20:15)。

作家が、真の弟子としてイエスの正しい教えを広めるためにマリアに後代の尼僧院に似た組織を思いつかせたのは、ユダヤの伝統を重視する男性教会指導者たちの女性に対する無理解に絶望していたマリアをはじめとする女性信者たちの心を理解したためであろう。これは、ある意味で、作家の初期の作品群について評されたことに通じる。すなわち、作家は〔男性聖職者が実権を握っている〕国教のルター派教会は人間を見る力を持ち合わせていないと言わんとしていたのである。¹⁵⁾ これを言いかえれば、古代キリスト教会の男性指導者たちも同様の致命的な欠陥を有していたとされるべきだろう。近代的な自由な発想にのっとりて創作するこの作家は現代の典型的な北欧女性作家ではあるが、あまりにも男性優位の正典の新約福音書に対立させたこの小説によって、著しい男性優位を減じていっそう事実に近い、女弟子(使徒)の視点に立って一個の「マグダラのマリアによる福音書」を意図したのではなかろうか。

(2000-08-30)

注

- (1) Fredriksson (1997:253). 最初期からの女性信者 Salome の発言：「わたしたちも自分の目撃したことを世に知らせることが大切かもしれませんね」
- (2) 一例として挙げれば、この小説は 1988 年にオランダで「ブック・オヴ・ザ・イアー」に選ばれ (Mosander 1998), そして 15 万部も売れている (<http://www.mkbnnet.nl/Nieuw/anp/CUL/981104333.shtml>). 同様にドイツにおいてもすでに前年に同じ栄誉に浴し (Mosander 1988), 11 版を重ねている (http://www.jrm.passagen.se/lidi/m_fredr.htm).
- (3) Cf. Gisby 1922:[2].
- (4) Cf. Mosander 1998.
- (5) Cf. Gisby 1992:[5].
- (6) <http://www.lysator.liu.se/runeberg/authors/fredmari.html>.
- (7) Fahlgren 1997:324.
- (8) de Boer 1998:121. 「マリアによる福音書」については、トーマス (1999) が好個の解説書となっている。「外典」については下記注 (10) を参照.
- (9) 本稿における聖書からの引用は、日本聖書協会 (1987) による。人名と地名の片仮名表記、そして句読法も同訳に従った。
- (10) 田川建三訳 (荒井 1997:60-61 所収) 参照。ついでながら、「新約聖書外典とは、正典から排除された、あるいはその中から正典に採用されなかった諸文書であるが、内容的には正典と同一の価値を持つとの要求を掲げ、伝承様式・文学形式上正典に類似するか、あるいはこれを補足するか、あるいはこれを補足する傾向を有する諸文書のことである。」(荒井 1997: 17)。
- (11) 荒井 1999:204.
- (12) トーマス 1999:258 参照.
- (13) <http://www.home.swipnet.se/~w.93281/kultursv.htm> による.
- (14) 小説では、この一般的な“常識”はマリアによってあっさり退けられている——「マリアはパウロのほうに向きを変えた。『御覧のとおり、あの方が生きているうちから作り話 (myterna) がはびこっていました。わたしは悪霊などにとり憑かれてはいませんでした。わたしはただ春と花が咲き誇る野原を見て幸せだったのです』」(原作 120-121 ページ)
- (15) Cf. Fahlgren 1997:324.

Den kvinnliga lärjunge Jesus valt

— Om M. Fredrikssons roman “enligt Maria Magdalena” —

Kunishiro Sugawara

Sammanfattning

Artikelns huvudsyfte är att för den japanska läsaren presentera den svenska kvinnliga författaren Marianne Fredriksson (1927-) och hennes roman “enligt Maria Magdalena” (1997).

Som Fredrikssons första verk i japansk översättning utkom *Anna, Hanna och Johanna* 1999; tyvärr en dålig översättning av den engelska upplagan (!). Dessutom finns det i den japanska översättningen faktiskt ingen upplysning om författaren och hennes författarskap; därför har jag skrivit detta i kapitel **1: Introduktion**. I kap. **2: Maria Magdalena beskriven i de fyra evangelierna** citeras de bibeltexter som klart nämner Maria Magdalena, först och främst för den japanska läsaren som inte väntas ha förkunskaper i Nya Testamentet. Själva romanen har jag skisserat ganska noggrant med många textcitat i japansk översättning i kap. **3: Romanen “enligt Maria Magdalena”**. Jag har diskuterat två ämnen i kap. **4**, för det första, **Den kvinnliga lärjunge Jesus älskat mest (4.1)**, för det andra, **Kvinnliga lärjungar emot den manschauvinistiska kyrkan (4.2)**.

Det finns en tradition i den kristna världen sedan medeltiden att Jesus stod i sexuell relation till “horan” Maria Magdalena, fast såvitt man tror på bibeltexterna som handlar om de två låter det knappast möjligt. Varför påstår Marianne Fredriksson det? Hon fick nog en viktig inspiration från det fragmentariska apokryfiska evangeliet enligt Maria Magdalena ur s k Nag Hammadi Library, vilket hon själv säger på bokens pärm. I sitt evangelium redogör Maria vad Jesus sagt i personliga samtal med henne. Det kunde väcka avund bland apostlarna och manliga lärjungar att Jesus älskade de kvinnliga lärjungarna mest av alla, först och främst Maria. I evangeliet enligt Maria finns en intresseväckande passage av aposteln Filippus, som säger: “Men Jesus älskade henne mera än någon av oss. Vi var sårade av och trotsade detta” (Thomas 1999:171). Det är inte osannolikt att Jesus älskade kvinnorna som nästan alltid stod närmast honom mest; de lämnade honom aldrig på Golgata och vid begravningen, vilket evangelisterna inte kunde förneka. Vi måste då inse att det i själva verket var kvinnliga lärjungar som hörde Jesu ord

och såg Jesu gärningar mest. Som den första av dessa kvinnor brukar Maria Magdalena nämnas, vilket man ser av texterna citerade i kap. 2.

Bland judarna ansågs kvinnorna vara mycket lägre än männen. Fredrikssons Maria är så desperat “– Ingenting kommer att förändras, sa hon till slut. Apostlarna är judar, rotade i urgamla fördomar att kvinnan inte har någon själ och att mannen är den enda människan.” (romanen sid 96). Gentemot detta skrev Simon Petrus: “Ni kvinnor underordna er era män...” (romanen sid 108). Men det var Jesu nya attityd att inte ha någon åsikt om kvinnor, att se dem som människor, och att godta alla människor som han fann dem, samt att inte ha några fördomar (jfr romanen sid 99).

I kap. 5: **Slutord** har jag försökt fundera över Marianne Fredrikssons avsikt med romanen: Jesu sanna lärjungar var de kvinnor som stod närmast honom hela tiden från Galiléen till Galiléen via Golgata. Författaren vill om möjligt få Maria Magdalena och hennes kvinnliga trosfränder att bilda ett litet kloster endast för kvinnor, utan lag och påbud. Låt Paulus och andra män förbli judar och stifta hur många lagar som helst, men Maria Magdalena borde som den utvalda följa Jesu fotspår, utan att forma några levnadsregler eller att skriva någon lag. Romanen måste vara ett evangelium à la Fredriksson, mindre manschauvinistiskt och mera verklighetsnära och feministiskt.

作品・資料

- Fredriksson, Marianne. 1997. *enligt Maria Magdalena*. Stockholm: Wahlström & Widstrand.
- Fredriksson, Marianne. 1994. *Anna, Hanna och Johanna*. Stockholm: Wahlström & Widstrand.
- フレドリクセ[マリア]ン, マリアンネ[マリア] 作. 亀井よし子 訳. 1999. 『白夜の森（上・下）』. 東京：講談社.
- 日本聖書協会. 1987. 『聖書 新共同訳』. 東京：日本聖書協会.

参考文献

- de Boer, Esther. 1988. *Maria Magdalena bakom myten? På jakt efter vem hon verkligen var*. Översättning Annika Johnsson. Stockholm: Bokförlaget Cordia. [Holländska originalets titel: *Maria Magdalena — de mythe voorbij*, 1996.]
- Bokspegeln*. Bonniers Bokklubb. Medlemstidning nr 9 1997. Stockholm: Bonnierförlagen.
- Fahlgren, Margretha. 1997. “Med Bibelen som forlæg; At fornægte sine dæmoner”, Elisabeth Møller Jensen (hovedred.). *Nordisk kvindelitteratur IV. På jorden 1960-1990*, 324-325. København: Rosinante.
- Forsås-Scott, Helena. 1997. *Swedish Women's Writing 1850-1995*. London & Atlantic Highland, NJ: The Athlone Press.
- Gisby, Catarina. 1992. *Marianne Fredriksson*. Författarporträtt 1992/4. Lund: Bibliotekstjänst.
- Lönnroth, Lars & Sverker Göransson. 1990. *Den svenska litteraturen VI. Medieåldern litteratur 1950-1985*. Stockholm: Bonniers.
- Mosander, Ingall. 1998. “Fenomenet Fredriksson”, *Aftonbladet* onsdag 16 december 1998.
- Topelius, Christer & Marie. 1989. *Vem är vem i Bibeln*. Stockholm: Rabén & Sjögren.
- 荒井献（編）. 1997. 『新約聖書外典』. 東京：講談社.
- 荒井献. 1999. 『聖書のなかの差別と共生』. 東京：岩波書店.
- トーマス, ゴードン著. 柴田都志子&田辺希久子訳. 1999. 『イエスを愛した女 聖書外典：マグダラのマリア』. 東京：光文社. [英語原題：*Magdalena. Jesus and the woman who loved him*, by Gordon Thomas. 1998.]